

特集 比較研究の地平／第三九回大会公開講演

ユーラシアの英雄叙事詩研究の方法をめぐつて

―テュルク・モンゴルの比較研究の試みから―

萩原 眞子

はじめに

ユーラシア、特に、中央アジアやシベリアの諸民族には豊富な叙事詩があり、なかでも英雄叙事詩については近年まで優れた語り部が少なからず知られていた。叙事詩の採録・出版はソ連時代から今日までロシアの主要都市ばかりでなく、各民族共和国でも盛んに行われてきており、かなりの蓄積が認められる。

英雄叙事詩としては、南シベリアでは *alpyg nıbaq* (シヨル)、*kaj chorchoq* (アルタイ)、*alpyrkh nymakh* (ハカス)、*ulger* (ブリヤート) が、東シベリアでは *olonkho* (ヤクート／サハ) などの名称があり、そのロシア語訳には *Epos*、*Skazanie* という語が当てられている。アイヌのユカラは叙事詩であるが、これには「カムイユカラ」と(英雄の)「ユカラ」が分別され、前者「神謡」は吟唱形式の定まった比較的短い詩である。いわゆる英雄叙事詩に相当するのは後者の英雄の「ユカラ」である。シベリアのトゥングース語系諸族にはニングマー／ニムンガカ

ンなどのなかに英雄叙事詩にあたる伝承がある。ただ、トゥングース諸族はシベリアの広大な地域に分布しており、明らかに英雄叙事詩が知られているのは、シベリア東部のエヴェンキやエヴェンにおいてである。アムールランド(アムール・サハリン地域)の諸族では比較的短い詩編が知られているが、その吟唱形式は明らかでなく、散文語りで伝承、記録されている〔萩原 二〇一三 参照〕。また、眼を中央ユーラシアに転ずると、カザフ、キルギス、トルクメンなど多くのテュルク諸族には長大な英雄叙事詩が知られている〔坂井 二〇〇一 他〕。

これまでシベリアで採録されている数々の英雄叙事詩についての研究はどちらかと言えば、特定の民族やテキストに関する個別的なものであった。それに対して、多民族にわたるクロスカルチュラルな比較研究である『シベリア諸民族英雄叙事詩の典型場面のインデックス(試論)』(二〇〇五年 ノヴォシビルスク出版 一三八―ページ)は意欲的な労作である。ユーラシアを広く鳥瞰する上で、本書の試みは有効な見通しを与えるものと思われる。

本稿ではこの書の概要と共に、このインデックスに照らして試みられたエヴェンキの叙事詩の分析を紹介しながら、英雄叙事詩のより広い比較研究の可能性を考えてみたい。

I E・N・クジミナ(編)『シベリア諸民族英雄叙事詩の典型場面の「インデックス」(試論)』について

原題 E. H. Кузьмина, Указатель типических мест героического эпоса народов Сибири (алтайцев, бурят, тувинцев, хакасов, шорцев, якутов), экспериментальное издание. Новосибирск 2005

【本書の構成】

序論「シベリア諸民族英雄叙事詩の典型場面(箇所)の体系化について」

「シベリア諸民族(アルタイ、ブリヤート、トゥヴァ、ハカス、シヨル、ヤクート)⁽¹⁾の英雄叙事詩の典型場面(箇所)の「インデックス」構成(八一〇ページ)

第1章 アルタイ英雄叙事詩の典型場面(二二二五九ページ)

第2章 ブリヤート英雄叙事詩の典型場面(二六一一六二五ページ)

第3章 トゥヴァ英雄叙事詩の典型場面(六一七七八〇一ページ)

第4章 ハカス英雄叙事詩の典型場面(八〇三一二五ページ)

第5章 シヨル英雄叙事詩の典型場面(一一七一一二五

ページ)

第6章 ヤクート英雄叙事詩の典型場面(二二七一二七三ページ)

利用文献

典型場面のアルファベット索引

【分析対象のテキスト】

分析の対象となっているのは、六民族の英雄叙事詩23篇である。

テュルク諸族＝

アルタイ(4篇)＝「カン・アルチン」、「オチ・バラ」など

トゥヴァ(2篇)＝「ボクトウグ・キリシユ」、「フナン・カラ」

ハカス(2篇)＝「アイ・フウチン」、「アルチン・アルイグ」

シヨル(3篇)＝「アルチン・スイリク」、「カン・メルゲン」、「カン・ベルゲン」

ヤクート(3篇)＝「キス・デビリエ」、「エル・ソゴトフ」、

「クルン・クルストウル」

モンゴル・ブリヤート(9篇)＝「アイドウライ・メルゲン」、

「アラムジ・メルゲン」など

【シベリア諸民族英雄叙事詩の典型場面(箇所)のインデックス構成】
以上のテキストに基づいて抽出された典型場面は次のように構成されている。

(I) 叙事詩の世界(8項目)

1 原初創造の時代

2 勇者とその敵対者の土地

- 3 勇者（女勇者）の領地とその家畜
 - 4 宮殿、ユルタ（天幕）、屋敷、馬繋ぎ
 - 5 民（臣下、貢納者）
 - 6 民の招集（会議、饗宴、勇者の命名に際して、惜別）
 - 7 捕虜、民と家畜の連行
 - 8 勇者（女勇者）の土地と所領の荒廃
- (II) 登場者（A～D 4項目）
- A 人間（22項目）
- 1 主人公の登場（誕生）、主人公の孤独
 - 2 勇者（女勇者）の命名、命名者の肖像
 - 3 主人公の急成長、成熟、大人の度合い
 - 4 勇者（女勇者）が家を出る動機（狩、家畜の確認、領地の検分、情報の取得、嫁探し、敵対者との戦い、悪夢など）
 - 5 旅立ちの準備、別れ（両親、嫁などとの）
 - 6 勇者の装束
 - a 衣服、甲冑
 - b 衣服の試着
 - c 武具（弓、矢、太刀など）
 - 7 勇者の旅
 - a 時間と空間の描写
 - b 障碍
 - 8 邂逅（両親、妻などとの）
- 9 煙管の喫煙
 - 10 人物像
 - a 勇者（女勇者）の相貌
 - b 二義的女主人公（勇者の姉妹、許嫁、蘇生者、妻、天女、女シャマン）の相貌
 - c 二義的主人公（勇者の兄弟、義兄弟、義父の汗など）の相貌
 - 11 心理状態
 - a 怒り、驚愕、恐れ、当惑、興奮、悲嘆、泣き、喜び、笑いなど
 - b 勇者の夢
 - 12 知性と体力
 - a 知恵、機転、狡猾、洞察力、力量、忍耐力、聴力、視力、嗅覚
 - b 超能力
 - c 音楽の才
 - 13 勇者の食事
 - a 食卓と料理の描写
 - b 料理の賞味
 - c 会話

14 闘い（合戦）

a 鷲の踊り

b 挑戦、闘いの条件

c 闘いの開始（戦闘前の罵りあい）

d 強弓を引く

e 矢（武器）の呪文

f 矢の飛行

g 闘いの「解剖学」（汗、血、泡、肋骨の露出、肉片など）

h 互角

i 闘いにおける勇者の身体状態

j 闘いの持続

k 生命力の保管場所と方法

l 闘いの結果⇨環境への影響、闘いの緊迫

15 勇者（女勇者）の勝利

16 敵対者の処遇（殲滅、帰順、処罰の方法）

17 勇者（女勇者）の敗北と破滅

a 勇者（女勇者）の破滅に対する周辺世界の反応

18 勇者（女勇者）の埋葬

19 真の姿の獲得、復活、治癒、清め

a 勇者による民の蘇生

20 英雄の結婚

a 婿への難問（その解決の条件）

b 帰郷の動機

c 花嫁との出立、帰途

21 饗宴（誕生、命名、結婚、敵に対する勝利を機に）、饗宴の準備、持続

饗宴の準備、持続

22 勇者（女勇者）のその他の試練と偉業⇨親族（姉妹、おじたち、両親など）からの難題

おじたち、両親など）からの難題

B 勇者の馬

1 馬の招来

2 馬の特徴

a 由来（降下、贈与、手持ち）

b 相貌

c 非凡な能力

3 馬との別れ

4 馬の遠征準備（治療、鍛練、世話）

a 鞍、手綱

b 勇者的疾走

5 馬の叱責、助言

C 仲介者

1 援助者

2 妨害者

D 人間の姿をした登場者

1 男性（怪物、マンガトハイ、アバーシなど）

2 女性（怪物、女マンガトハイ、アバーシ、シメル

デイカなど)

(Ⅲ) 魔法の品(運命の書、文、矢、指ぬき、金の卵、スカーフ、宝石など)

(Ⅳ) 構成上の挿入

1 歌いだし

2 つなぎのフォーミュラ

3 エピソード間の挿入

4 語り終い

(Ⅴ) 語り部の(聴き手に対する)口上(remarks)

1 口演開始前の聴き手に対する口上

2 口演途中の口上

3 口演終いの挨拶

Ⅱ 「テュルク・モンゴル」の英雄叙事詩の共通性と特異性

以上のように抽出された典型場面を全体として眺めてみるなら、取りあげられた資料についていくつか顕著な特徴がみとめられる。まず、(Ⅰ)から(Ⅴ)までのなかで、テキストの内容についての項目は(Ⅲ)までであり、(Ⅳ)、(Ⅴ)は語り部による口演にかかわる。テキストの構成では(Ⅰ)は序章として勇者が登場する時代的な背景が語られる。それはしばしば遠い昔のこととして、未だ現世の「我々」つまり、現に会している「語り手と聴き手」がまだこの世にいなかった時代のこととされる。その時代のことではあるものの、インデックスには遊牧牧畜民

社会のさまざまな事象や事件が反映されている。

(Ⅱ)では登場人物が扱われるが、これには(A)人間と(B)馬、(C)仲介者、(D)人間の姿をした登場者とが区別されている。(A)には22項目が立てられ、そのなかでもっとも多くの小項目があるのは、闘い(合戦)についてである。闘いについては事細かに語られるが、そもそも決闘や合戦など闘いこそは英雄叙事詩一般のもっとも主要なテーマである。

(A)の人物像の描写はその出生からはじまり、姿形や装束、性格描写や表情など細かな項目があるが、実際の語りの場ではそれによって聴き手は登場する主人公やヒロインたちを身近な存在として想像することができるはずである。

テキストのもう一つの山場は主人公など勇者の結婚とその祝宴であるが、祝宴は結婚に際してばかりでなく、誕生、命名、凱旋などの折にもあり、それはテュルク・モンゴル社会の慣習を反映している特徴であるかもしれない。

もう一方の主要な登場者である馬についても5項目が分別されており、馬(もしくはトナカイ)は主人公やその他の勇者に次ぐ重要なキャラクターである。このことは、テュルク・モンゴルばかりでなく、ユーラシアでは一般的な特徴である。

(Ⅲ)には魔法の品として、主人公やヒロインが手にし、また、これはという刹那に大きな効力を発揮する不思議な小道具が取りあげられている。それらは必ずしも英雄叙事詩だけに特有なものではなく、昔話など他のジャンルでも登場する魔力ある物である。

このインデックスの特徴となっているのは、先ず第一に、その元となっているテキストが南シベリアのアルタイ・サヤン山脈地域に在るアルタイ、トゥヴァ、シオル、ハカスと、バイカル湖地域のプリヤート、及び東シベリアのヤクート（サハ）の英雄叙事詩である。この諸民族は総じて「テュルク・モンゴル」として、共通起源が説かれている。プリヤート語はモンゴル語グループに属するが、ヤクート語を含め他の5民族の言語はテュルク語である。ヤクートは地理的に少しく北方に偏っているが、その遠祖はやはり南シベリアに拠っていたと考えられている。第二には、いずれの民族の英雄叙事詩も遊牧畜社会の諸相を背景としていることである。しかしながら、現実には農耕、手工業、トナカイ飼育と古代からの狩猟など、地域により程度の差はあるものの複合的な生業が行われてきた。第三には、登場人物の項に人間と並んで馬が取りあげられている。このことは、テュルク・モンゴルばかりでなく、中央ユーラシア、カフカズの諸民族の英雄叙事詩や文学などにも共通する大きな特徴である。馬は人語を話し、慧眼をもつて先を見通し、主人である勇者に助言を与えるばかりでなく、勇者と同様にしばしば巨軀をもち、主である勇者の代役を務めることもある。第四には、遊牧畜社会では歴史的に絶えず部族間や民族間の抗争がくり返され、英雄叙事詩にはそのことが多様な形で反映されている。

さて、原書では上記のインデックスに照らして、23のテキストから該当する項目についてその叙述を抜き書きし、その結果

が巻末の「典型場面のアルファベット索引」に集約されている[Kryamina 2005:1378-1381]。それに基づいて筆者が作成した付表では、「テュルク・プリヤート」の項で、各インデックスについて5以上の民族のテキストが該当する場合にX印を付した。(付表①参照)²⁾

この付表から明らかなことは、ごく少数のインデックスを除くなら、テュルク諸族とプリヤートの英雄叙事詩は大綱において共通していることである。その例外的なインデックスとは、対応するテキストが必ずしも多くはない場合であり、いくつか例を挙げるなら、(Ⅱ) 12 c 音楽の才、(Ⅱ) 14 a 鷺の踊り、(Ⅱ) 14 k 生命力保管の場所と方法などである。音楽の才として抽出されている例として、アルタイの英雄叙事詩「オチ・バラ」には、「女勇者オチ・バラがアルタイ山で、高い声で歌を歌うと、鳥獸たちがやってくる、岩山の上には花咲き、スギは新緑に被われる」とある「一二五」。アルタイの英雄叙事詩「マーダイ・カラ」には、「笛吹けば針葉樹は芽吹き、声をのびやかに歌えば岩に花咲く、夏のアルタイにその声は流れ、冬のアルタイにその声は響きわたる」とあり「一二七」、また、ハカスの英雄叙事詩「アイ・フーチン」にも「歌を歌えば、その声は六日も七日も響きわたり、草は萌いで、木々には葉が芽吹く」「九六三」とある。

鷺の踊りの例として、トゥヴァの英雄叙事詩「フナン・カラ」では、勇者が大手を振りながら登場する様が歌われる「七二五」。それはモンゴル相撲において力士が登場する際の仕草に類似し

ている。さらに、「生命力保管の場所と方法」とは、勇者の敵対者や魔物などの靈魂がその身体にはなく、どこか別の場所に特殊な形で秘匿されているという場合である。そしてその秘所から靈魂を見つけ出し、それを破滅させない限りは敵対者を倒すことはできない。その靈魂が、例えば、遙か彼方の海中の生きものの体内に保管されていることがあるが、このような靈魂秘匿のモチーフはテュルク・モンゴルばかりでなく、ユーラシアの諸多の民族の英雄叙事詩や説話に広く認められる。このような特異なインデックスは英雄叙事詩のみならず、叙事詩一般の検討にも手がかりになろう。

さて、著者のクジミナは「インデックス」で、テュルク諸族とモンゴル・ブリヤートの英雄叙事詩に認められる共通の特徴から、次のような結論を導いている。すなわち、両者の「英雄叙事詩の古代の核・祖型がテュルク・モンゴル諸族が分岐以前の時代に形成され、その後、この同じ原郷地を出た諸民族はアルタイ・サヤン山脈の広大な地域に拡散しながら、その伝統を保持するばかりでなく、すでに明らかに becoming した叙事詩の定型（カノン）に則して自己の叙事作品を発展させることができた。：典型場面はこの唯一の起源に由来するかなり古い時代のある種の叙述のステレオタイプ（傍線筆者）となっている。それが本質的には説話から説話へ、テキスト間での繰返しとなり、それによって『共通個所』が確固として保持されて、主題構成のファクターとなってきた

た」[Кудашкина 2005:5]。言いかえるなら、今日南シベリアと東シベリアに在るテュルク諸族とモンゴル・ブリヤートの英雄叙事詩の骨子は、その祖先がまだ原郷地を離れない段階で醸成されたということであり、その共通性は民族起源に由来するとされる。

III エヴェンキ（トウングース語）の英雄叙事詩に共通する特徴（付表②③参照）

上記のテュルク・モンゴルの「インデックス」に照らして、Yu・V・リモレンコはエヴェンキの英雄叙事詩の分析を試みている [Имореико 2007: 40-47]。取りあげられたテキストはエヴェンキのニムンガカン4篇であるが、比較のためにヤクートのオロンホ2篇とブリヤートのウリゲール4篇が検討されている。

エヴェンキは西ではシベリアの中央部エニセイ川右岸流域を中心に居住しており、東ではヤクーチヤ、すなわち、レナ川の東部支流（アルダン川、ウチュル川）域から太平洋沿岸・極東地域、サハリンにまで広く分布し、その文化には地域的な差違がある。さらに、東でもヤクーチヤと太平洋沿岸・極東では、特に、生業による文化的な特徴の違いが英雄叙事詩に反映している。分析の対象となったテキストの採録は「全能なるデヴェルチエン勇者」と「勇敢なるソダニ勇者」がヤクーチヤでなされ、「コダクチョン」はそれより東の太平洋沿岸（ハバロフスク地区）、「フルグチョン」はヤクーツク州とハバロフスク地区の境界（アルゴマ川地域）での採録である [Бачишвили 1966: 178, 234; 萩原 一九九七]。

そして、前者、ヤクーチャ採録の2編には隣接・接触するヤクート(サハ)の遊牧牧畜文化の影響が濃厚であるのに対して、それより遠い東方地域で伝承されている2編ではその特徴はなく、徒渉の(家畜飼育を伴わない)狩猟民俗文化が反映している。付表では「インデックス」の該当個所にヤクーチャのエヴェンキ②では○印、ヤクーチャより東方に分布するエヴェンキ③では△印を付した。括弧のある(○)、(△)は四つのテキストのなかの一部に該当する場合を示した。

この付表で指摘できることは、テュルク・モンゴルのインデックスに照らして、②ヤクーチャ・エヴェンキの英雄叙事詩では大方の項目が対応しているが、③東エヴェンキではその対応個所はかなり少ない。ヤクーチャ・エヴェンキの英雄叙事詩がサハのオロンホに近似していることは、両者の直接的な接触交流などの歴史的経緯によることは明らかで、登場人物である勇者および闘いの場面ではほぼ全体について共通の特徴がみられる。異なるのは、例えば、テュルク・モンゴルでの馬に対応して、エヴェンキでは馬(や牛も)登場することはあるが、飼養するトナカイが勇者の無二の同伴者である。これに対して、家畜飼育を行わない東エヴェンキでは、登場人物と闘いの場面については対応する項目があるものの、全体としては必ずしもヤクートやテュルク・モンゴルの英雄叙事詩に近似しているとはいえない。ただ、ここで留意しなければならないことは、分析の対象として取りあげられたテキストが、その民族の地域的なエスニック集団の叙事詩一般の

特徴を反映しているとは、限らないかもしれないということである。このことは比較研究の上で念頭に置くべき一つの要点であろう。

ブリヤートの英雄叙事詩との比較について、リモレンコはヤクートのオロンホ2篇と共にブリヤートのウリゲール四篇を取りあげている[Имперко 2007: 40-47]。付表ではブリヤートとの比較資料を割愛したが、概略的には、ヤクート、ヤクーチャ・エヴェンキ、東方のエヴェンキ、ブリヤートの四者に共通するインデックス項目(ア)もあるが、いうまでもなく、徒渉の狩猟民である東方のエヴェンキを除く3者だけの共通項目もある(イ)。(ア)では主人公が登場する最初の時代、主人公の急成長、邂逅場面での挨拶・会話、人物の心理の描写、挑戦、互角、戦闘の持続、その周囲への影響、人間の姿をした魔物などである。(イ)では、牧畜民に固有の項目、すなわち、所領などに関する項目、勇者の装束、馬具などの装備、主人公の魔力、馬の競走などについてである。

しかしながら、東方の狩猟民エヴェンキの英雄叙事詩には主人公の出生や孤独であること、家を出る動機(主として狩猟)が顕著な特徴としてある。それに加えて、リモレンコはエヴェンキの叙事詩に固有の特徴的な場面として、「家畜の呼び集め」、勇者たちが遭遇する場面での相手の「注意の喚起」、「対話のはじめのセリフ」が頻出することを挙げ、これをテュルク・モンゴルのインデックスに付加することを提唱している。[Имперко 2007: 38-39]。

IV 「インデックス」の可能性と課題

(1)世界の口承文芸については各種の分類・「インデックス」が蓄積されてきているが、殊、ユーラシアの英雄叙事詩についてはその限りではない。『シベリア諸民族英雄叙事詩の典型場面のインデックス』はユーラシアのなかでも、特にシベリアに盛んに行われてきた英雄叙事詩の伝統とその記録資料の膨大な蓄積についての体系化をめざす試みであり、その意義は大きい。

(2)この試論『インデックス』は「テュルク・モンゴル」を対象として、言語的にも民族起源のうえでも密接な関係にある六民族の叙事詩研究者による共同研究である。基準となる「インデックス」に照らして23のテキストの分析から明らかになったことは、今日では隔たった地域にある諸民族の英雄叙事詩に顕著な共通性があり、それが叙事詩のいわば主軸もしくは基幹を構成しているということである。その具体的な核となっているのは勇者・英雄の戦闘と結婚であるが、その叙述や詩学的なスタイルに共通するある種のステレオタイプは原郷地において形成されたものと仮定されている。

(3)この『インデックス』の項目については、テュルク・モンゴル文化の特徴がかなり細部にわたって立項されている。言語系統を異にするエヴェンキのテキスト分析からは、上記のように新たな典型場面として「家畜の呼び集め」、勇者たちの遭遇場面での相手の「注意の喚起」、「対話のはじめ」を「インデック

ス」に付加することが提唱されている。これに鑑みるなら、諸多の民族のテキスト分析から新たな項目を付加することによってユーラシア全般にわたるより一般的で、より精練されたインデックスの策定が可能になろう。

(4)それによってこの試験的な『インデックス』の普遍性、有効性を高めるだけでなく、比較によって個々の叙事詩の独自性がより明らかになろうと思われる。

(5)この『インデックス』によるテキスト分析の具体的な意義として、少なくとも、「テュルク・モンゴル」の英雄叙事詩との近似や隔たりの度合いを測ることができよう。特に、アイヌの叙事詩については、アムールランドの英雄説話をも含めて、このテュルク・モンゴルのインデックスを一つの基準として検討してみるなら、ユーラシアにおけるその位置づけを多少なりとも明らかにできよう。

(6)英雄叙事詩の「典型場面(個所)」とは、すなわち、叙事詩における普遍性を明らかにする試みである。ロシアの叙事詩研究者B・N・プチャーロフは小論「叙事詩の普遍性」(Yunbeccann, universal)とその民族的・地域的ヴァリアント」(二〇〇一)のなかで、ユーラシアの多様な民族の叙事詩の多くに共通性・類似・平行する特徴があることについて、それが地域や民族を超えた一般的な普遍性に由来する可能性があることを論じている。問題はその理由である。ここで紹介した著書では、「テュルク・モンゴル」の叙事詩の普遍性が民族の原郷地に由来することが結論づけられているが、より多くのテキストを分析するなら、その比較を

表『シベリア諸民族英雄叙事詩の典型場面のインデックス』

(各○番号の横の印は以下の資料を元に作成した)

ト)、ブリヤート [E.H.Кузьмина 2005: 1378-1381]

2007: 40-47]

④ ユカラは暫定的

(飲酒)

● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●

●	●	
---	---	--

注

- (1) 人口について二〇〇二年の統計では、アルタイ(六万七千人)、トウヴァ(二四万人)、ハカス(七万六千人)、シヨル(一万四千人)、ヤクト(四四万人)、ブリヤート(四四万人)である。
[Большая Российская Энциклопедия, 2004, Москва.:170]
- (2) 付表はЕ.Н.Кузьмина (2005:1378-1381), Ю.В.Диморенко (2007:4047) を元に作成した。
- (3) 「荻原 一九九七」にエヴェンキの英雄叙事詩二篇「勇敢なるソタニ勇者」、「絢爛たる刺繍衣の万能なるデヴェルチエン勇者」の梗概がある。
- (4) 取りあげられたテキストは、「アラムジ・メルゲン」(一九九一刊)、「オソードル・メルゲン」(一九四一採録)、「タバタイ・ナハタイ・トーレイ・メルゲン」(一九二九採録)、「オレエ・ヘンゼ・ウラーンダイ・メルゲン」(一九二九採録)である。後の二篇はリモレンコの翻訳による [Диморенко 2007:35]。
- (5) もっとも早くにシベリア各地で精力的にエヴェンキの口承文芸を調査採録し、研究をおこなった G・M・ヴァシーレヴィッチは、東エヴェンキの叙事詩が就中ヤクト、ブリヤートのそれと近似していることについて、「共通する叙事詩の伝統はテュルク諸族とモンゴル諸族とがトゥングース語系諸族と同様に未だ狩猟民であり、牧畜文化が生まれつきの遠い昔に創られたように考えられる」と述べている [Васильевич 1966:13]。

文献

- Большая Российская Энциклопедия. 2004. Москва
Васильевич Г.М.
1966 Исторический фольклор эвенков: сказания и предания. М.-Л.
Кузьмина Е.Н.
2005 Указатель типических мест героического эпоса народов Сибири (Алтайцев, Бурият, Тувинцев, Хакасов, Шорцев, Якутов). Новосибирск
Лебедева Ж.К.
1981 Архаический эпос эвенков. Новосибирск
Диморенко Ю.В.
2007 Типические места и сюжет героического эпоса: универсальное и уникальное (на материале трех эпических традиций) Поэтика женров фольклора народов Сибири: миф, эпос, ригвал. Новосибирск. 33-48
Притигов Б.Н.
2001 Универсалии эпического нарратива и его этнические региональные вариации. Язык, литература, эпос (К 100-летию со дня рождения академика В.Н. Жирмунского), СПб: 411-417
荻原眞子
一九九四「メルゲンとブジの物語―ナーナイの英雄叙事詩」

『口承文芸研究』第17号 九二一—一〇五

一九九七〔資料〕エヴェンキの英雄説話の2つのテキスト

『北海道北方民博物館研究紀要』第6号 一二五一—一四六

二〇〇一「エヴェンキの英雄叙事詩『イルキスモンジャ勇者』

〔荻原眞子 二〇〇一a 所収〕

二〇〇一a (編)『ユーラシア諸民族の叙事詩研究(1) —

テキストの梗概と解説—』(研究プロジェクト報告) 千葉

大学大学院社会文化科学研究科

二〇〇二「ユカラのヒロイン—英雄叙事詩の比較研究試論」

『口承文芸研究』第25号 一〇四—一二〇

二〇〇四 (編)『ユーラシア諸民族の叙事詩研究(2) —テ

キストの梗概と解説』千葉大学大学院社会文化科学研究科

二〇〇五「競う花嫁・女勇者・シャマン—ユーラシアの英雄

叙事詩に共通するヒロイン像」(吉田敦彦監修)『比較神話

学の鳥瞰図』大和書房 一七五—二〇四

二〇〇六「人と動物の婚姻譚—王権神話から異類婚姻譚まで」

『説話・伝承学』第14号 二一七—二三一

二〇〇七「呪の逃走」—ユーラシアへの手がかり』『口承文

芸研究』第30号、一一二〇

二〇〇八 (編)『ユーラシア諸民族の叙事詩研究(3)』千葉

大学大学院人文社会科学研究所

二〇〇九「神話的宇宙と英雄の世界—アイヌ叙事詩につい

てユーラシアの叙事詩研究からの覚え書」(篠田知和基編)

『天空の世界神話』八坂書房 二一七—二三八

二〇〇九「神話・英雄叙事詩における天界と天界びと—シベ

リアのサハ(ヤクート)の口承文芸から—」『アジア遊学』
二二一 五一—五七

二〇一〇「Aonomomo (我つまびらかに述べ)」について—

アイヌ叙事詩ユカラの(一人称)叙述によせて」『口承文芸

研究』第33号 六五—七六

二〇一一「英雄はおさな子—英雄叙事詩における神話につい

て」『説話・伝承学』第19号 一一二〇

二〇一一「フィンランド叙事詩『カレワラ』を読む—文学作

品としての叙事詩」『千葉大学 ユーラシア言語文化論集』

13号 二二—三七

二〇一三「ユーラシア口承文芸の二つの様態」『千葉大学

ユーラシア言語文化論集』15号 一一九

二〇一四「求婚難題・婚姻闘争・雌雄選択」『千葉大学 ユー

ラシア言語文化論集』16号 一一—

二〇一四「叙事詩のなかの鉄文化」(篠田知和基編)『神話のシ

ルクロード』楽瑯書院 三三三—三四二

坂井弘紀(訳)

二〇一一「ウラル・バトゥル」平凡社 東洋文庫

二〇一五「アルバマス・バトゥル テュルク諸民族英雄叙事

詩」平凡社 東洋文庫

二〇一五「英雄叙事詩とシャマニズム—中央ユーラシア・テュ

ルクの伝承から」『和光大学表現学部紀要』15号 三三—五四

若松 寛(訳)

一九九三「ゲセル・ハーン物語 モンゴル英雄叙事詩」平凡

社 東洋文庫

一九九五『ジャンガル モンゴル英雄叙事詩2』平凡社 東洋文庫

二〇〇一『マナス 少年篇 キルギス英雄叙事詩』平凡社

東洋文庫

二〇〇三『マナス 青年篇 キルギス英雄叙事詩』平凡社

東洋文庫

関連文献

『ユーラシア諸民族の叙事詩研究(1) — テキストの梗概と解説』
(Epic study of Eurasia (1) Introduction and digest of texts)

(千葉大学社会科学部研究科研究プロジェクト報告 二〇〇一)

荻原眞子「ユーラシア諸民族の英雄叙事詩について」

荻原眞子「エヴェンキの英雄叙事詩『イルキスモンジャ勇者』」

上村 明「ハルハ・モンゴルの英雄叙事詩『アガイン・オラー

ン・ハーン』・『三歳のゴナン・オラーン・バートル』

斎藤君子「ハンティの叙事詩『いとしい勇士』下界の商人・

上界の商人にまつわる聖なる物語」

坂井弘紀「カラカルパクの英雄叙事詩『アルバムス・バトゥル』」

坂井弘紀「カザフの英雄叙事詩『エル・エディゲ』」

丹菊逸治「サハリンアイヌの叙事詩『浅井タケ伝承のハウキ

— オタストウンクフの結婚』

山下宗久「シヨルの英雄叙事詩『カーン・ベルゲン』・『アル

ティン・スイルイク』

山下宗久「サハ(ヤクト)の英雄叙事詩『モドゥン・エル・

ソゴトフ』・『クイース・デビリイェ』

于 曉飛「ホジェンの伝承文学イマカン『シャンソウ・モル

ゲン』・『シャールン・モルゲン』・『スス』、タルング『白城
人の子孫』・『七兄弟』、シヨフリ『姉と弟』・『蛇娘』

『ユーラシア諸民族の叙事詩研究(2) — テキストの梗概と解
説』(二〇〇四)

荻原眞子「エヴェンキの英雄叙事詩『デルゲニ』」

斎藤君子「マンシの叙事詩『シベリアの女・切断された鉄

の2人の息子』

坂井弘紀「ノガイの英雄叙事詩『アディル・スルトン』」

丹菊逸治「ニヴフの昔話『死者の国へ行って来た話』」

于 曉飛「ホジェンの叙事詩イマカン『カンタ・モルゲン』」

『ユーラシア諸民族の叙事詩研究(3) — テキストの梗概と解

説』(二〇〇八)

荻原眞子「勇者たちの世界 — ユーラシアの英雄叙事詩から」

王国明(斯琴 訳)「トウ(土)族の『ゲサル』の収集と保存」

坂井弘紀「中央ユーラシア・テュルクの英雄叙事詩『オラク

とママイ』

D. タヤ「叙事詩を誰に聴かせるか — モンゴルの英雄叙事詩

『ジャンガル』の語りを中心に」

ナムジラ「アルタイ・テュルク系烏孫とモンゴルの狼烏伝説

の比較研究」

ムンクジャヤ「モンゴル英雄叙事詩の比較の試み」

Eva Schubert "Research about the Alay Magtaal (Ode to the

Alay Mountains)"

Шүбєрт Эва «Алтайн магтаалыг судалсан нь»

(おぎはら・しんこ/千葉大学名誉教授)